

櫻だより



氷見市立北部中学校
久しぶりの校長室から
令和6年10月31日

本物の力

創立 50 周年記念式典が終わった。

この学校で果たすべき大きな役目を終えたような気がした。

携わっていただいた全ての方に感謝します。ありがとうございました。

さ、後期生徒会テーマでもある Next Stage へ向かいましょう。次は何をしましょうか。

次へ向かう前に、50 周年記念コンサートの裏話を少し。

式典前夜 20 時頃のこと、鍵盤奏者の元へ「よろしくお願いします」と美月さんからメッセージ。

奏者は美月さんに電話し、「よかったら生演奏でやらない？」と。

10 分程度のやりとりの後、奏者は音源から譜面おこしにとりかかる。

30 分ほどピアノの前へ行っただろうか、「こんな感じかな」と完成した楽譜を持ってきた。

譜面に書かれてあるのはコード進行のみ。音符は全くなし。

当日朝 8 時、会場で初顔合わせ。そしてすぐにリハーサル。

1 回のみでのリハで、「こんなもんでしょ」という感じで終了。

そして、本番のあの歌声と演奏。素直に感動しました。



「本物」の力を強く感じた。

ネットの発達で、自宅にいながらどんな映像でも容易に見ることはできる。

だけど、ライブで感じられる迫力はやっぱり違う。

音楽・芸能を生業にするというのは、華やかそうであるが難しい世界である。

憧れだけでは、決してたどり着けない世界だ。

そういう世界で、生き残っている力、本物の力を感じた。

現状にたどり着くまで多くの挫折や困難があったとか。

佳南さんもミスワールドまでの道はとてつもなく険しかったとか。

世界大会の時は、スーツケース 4 個持って一人で大会に臨んだらしい。

「負けてたまるか」というプライドがあったから、努力を続けられたとか。

挫折や困難も含めて「全てに意味がある」とも。

シンポジスト 3 名とも安定した職ではない。

毎月の給与が保証されている教員とは正反対の職。

鍵盤奏者の父親は「5 年やって芽が出なかったら戻ってこい」と、挑戦させたいらしい。

明日はどうなるかわからない緊張感の中で生きているから、言葉にも力があるのだと思う。

今回の式典が、生徒にとって、Next Stage に向けて何か感じる場所があればと願う。

美月さんが歌う前に「真剣に叱ってくれる人が本当に優しい人」と質問者に伝えていた。

「ならぬものはならぬ」と真剣に叱ることができるかどうか、そういうことが教員としての本物の力なのかもしれない。

そんなことを感じた一日でした。